

### 奴隷貿易の原点：レオノーラ・ミアノの『影の季節』を読む

元木，淳子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012242>

# 奴隷貿易の原点

—— レオノーラ・ミアノの『影の季節』を読む ——

元 木 淳 子

## 1. はじめに

レオノーラ・ミアノ Léonora Miano (1973-) は、カメルーン出身のフランス語で書く女性作家である。1991年来フランスに在住し、2005年に小説 *L'Intérieur de la Nuit* 『夜の内側』<sup>(1)</sup> (ルイ・ギル賞2006他) を発表して以来、精力的な作家活動を展開している。デビュー以来ミアノの作品は大いに注目され、数々の賞を得てきた。2012年には、その著作全体に対してブラック・アフリカ文学大賞が贈られている。

『夜の内側』、*Contours du Jour qui vient* 『来るべき日の輪郭』(2006)<sup>(2)</sup> (高校生ゴンクール賞2006他)、*Les Aubes écarlates* 『深紅の夜明け』(2009)<sup>(3)</sup> (アフリカ・カリブ芸術杯賞2010) は、アフリカ三部作と呼ばれ、現代アフリカにおける武力紛争や子ども兵の問題が描かれている。

他方、*Tels des Astres éteints* 『消えた星のように』(2008)<sup>(4)</sup> や *Ces Ames charnines* 『これら悲しき魂』(2011)<sup>(5)</sup> などでは、フランスに暮らすアフリカ・カリブ系の若者たちが、アイデンティティーを模索するさまが描かれている。

このように、従来ミアノの作品は現代世界を舞台としていたが、2013年、*La Saison de l'Ombre* 『影の季節』<sup>(6)</sup> (フェミナ賞2013) で初めて奴隷貿易を主題とした歴史小説が現れた。奴隷貿易をテーマとしたものとしては、ガーナのアイ・クウェイ・アーマの『二千の季節』(1973)<sup>(7)</sup> などがあるが、アフリカ大陸にとってきわめて重要な史実であるにもかかわらず、アフリカ文学においては、奴隷貿易を語ることは従来タブー視されてきた感がある。近年では、トーゴのカンニ・アレンが、『奴隷たち』(2009)<sup>(8)</sup> で19世紀初頭のダホメにおける奴隷貿易を描いている。これにつづく『影の季節』では、どのように奴隷貿易が語られている

のだろうか。

本稿では、ミアノの『影の季節』とアフリカ三部作を検討し、アフリカ文学におけるその独自性について考察する。

## 2. 現代アフリカ・シリーズ

ミアノは1973年、カメルーンの経済首都ドゥアラに生まれた。父は薬剤師、母は英語教師だった。中高一貫の私立校に学び、文学とジャズに出会ったという。授業で学んだネグリチュードのエメ・セゼールやレオン・ダマの詩に衝撃を受け、ラングストン・ヒューズやジェームズ・ポールドウィンなどのアフリカ系アメリカ人作家にも開眼した。ネルソン・マンデラやトマス・サンカラを尊敬し、アパルトヘイトを描いた映画『アモック』や、奴隷貿易を描いたテレビドラマ『ルーツ』を見て、反抗の気を養ったという。十六歳の頃から小説を書き始め、以来年1作のペースで書き続けている。カメルーンの大学に進学したが、キャンパスが騒乱状態になったため、1991年、ヴァレンシエンヌの大学に留学し、アフリカ系アメリカ人作家について学んだ。ミアノは私生活について多くを語らないが、『来るべき日の輪郭』出版の時点で、十代の娘を育てていることが報じられている<sup>(9)</sup>。

以下では、アフリカ三部作について見てみよう。三つの小説は、互いに時、場所、登場人物が重なり合っている。なお、『影の季節』と対比するために、以降は、上記三部作を現代アフリカ・シリーズと呼ぶことにする。

### 『夜の内側』

現代アフリカの架空の国ムボアスでの物語。経済首都ソンベの南に位置するエク村が舞台である。白人が支配していた時代に、エクの伝統社会は根底から覆えされた。今は呪術師の一族が権力を握っている。村の男たちは出稼ぎに行き、村では老人と女こどもがひっそりと暮らしている。首長は自分の地位を保全するために、村人が学んで発達することを疎んじている。

女主人公のアヤネは、この村の出身でフランスに留学中だったが、母危篤の報を受けて帰国してくる。アヤネの母がよその村の出身だったこともあり、村では親子はずっと浮いた存在だった。とりわけ、村の女を束ねる立場にある女性指導者のイエはアヤネを忌み嫌っている。

ある時、「変革の力」と名乗る武装集団がソンベに現れたという噂が流れる。アヤネはすぐさま国外脱出を考えるが、村の長老たちはあわてる様子もない。ひとりイエだけが、奇妙な夢を見て不安を感じ、夢解きを首長に求めるが取り合われなかった。

まもなく、27人の男たちが村に夜襲をかける。アヤネは木に登ってからくも身を隠した。武装集団のリーダーは、大学院で歴史を専攻したアフリカ中心主義者である。「白人が残していった悪しきことどもを清算し、恥を血ですすごう」と村人に向かって演説する<sup>(10)</sup>。武装集団は、村人に命じて老首長を殺害させる。さらに、共同体の絆を固める伝統儀礼の復活だと称して、村の男児一名を人身御供として殺させ、その肉の入った汁を村人に食させる。そして、村の九人の少年をこども兵として連れ去っていく。

難を逃れたアヤネは、ことの真相を村人に尋ねて回るが、この夜の惨劇をだれも語ろうとはしない。ただひとり、強いられたとはいえ、夫が男児の殺害に荷担したことが許せない村の女イノニが、アヤネに事実を告げる。

アヤネは衝撃を受けてソンベに逃げ、遠縁でシングルマザーのウェンギサネのもとに身を寄せる。

まもなくアヤネの母が息を引き取った。供養のため村に戻ったアヤネに、イエはイノニが自殺したと告げ、年に一度の墓参り以外、村に戻ってはならぬとアヤネを追放するのだった……。

この作品には肯定的なヒーローがいない。主人公のアヤネは、その経歴が作家ミアノと重なるところの多い人物だが、彼女も、共同体から排除される悲劇のヒロインではない。村の女たちが守っている伝統や慣習を無視し、惨劇の真相を知ろうと好奇心をむき出しにする慎みのない態度は、否定的に描かれている。また、アヤネが、惨劇に関わった村人のことを許さないでいると、ウェンギサネが、ヨーロッパの眼差しで自分の出身社会を判断し、否定してよいのかと問いかける。いわば、アヤネはアフロピアン（ヨーロッパ的価値感をもったアフリカ系人）を体現する存在といえよう。

2005年秋、フランスでは、郊外の移民地区で、現状に憤る若者たちが車を燃やすなどの騒擾が多発していた。『夜の内側』はこの事態の最中に出版された。「ギリシャ悲劇のような迫力ある小説」<sup>(11)</sup>といった賞賛を得る一方で、「食人儀礼など、暗黒のアフリカのイメージを上塗りするようなスキャンダラスな作品だ」と

いった批判も受けた<sup>(12)</sup>。これに対して、ミアノは「野蛮は人間社会のどこにでも存在する。アフリカ人の中には、他者から吹き込まれたとおりに自己卑下する人がいる。私はあえて彼らの自尊心を傷つけ、ショック療法を行いたい。そこから変化や復興が起こるはずだ」と応じている<sup>(13)</sup>。

### 『深紅の夜明け』

この小説は、出版された年は『来るべき日の輪郭』のあとだが、執筆は先行していたという。実質的には、『夜の内側』の続編である。

ムボアス国では、北部出身の大統領が三十年来政権の座にあって、その間、植民地期より多くの人々が殺されてきた。ムボアス南部で石油資源が見つかり、これを狙って、隣国の反体制武装勢力「変革の力」が、ムボアス南部を併合しようと進撃してきた。これにはムボアスの反体制勢力も絡んでいる。

アヤネとウエンギサネは、ヨーロッパ人女性アイダとともに、混乱の中で行き場のないこどもたちの世話を始める。アイダは教師だったが、定年後ムボアスで救護施設を開いたのだった。ここには、緘黙する少女ムサンゴなどが保護されていた。

ある時、アヤネは、エク村から連行されて兵士にされた少年エパが、脱走し、行きだおれていたところを助ける。さらに、アヤネは、拉致された他のエクの少年たちも救い出して村に戻し、ようやく村の女たちに受け入れられるのだった。

### 『来るべき日の輪郭』

『深紅の夜明け』で施設に保護されていた少女ムサンゴの物語である。少女は九歳の時、父を失う。その死の原因が、ムサンゴが呪われていることにある、と占い師が騙らったため、実の母親が娘を虐待した。耐えきれなくなったムサンゴは母の元から逃げ出し、言葉も失ってさすらい、アヤネらに保護された。その後も苦難の中で少女は懸命に生きのび、自分をうちやった母を再び捜し出すにいたる。再会の時、母は娘に情愛を示し、娘の不在に苦しんできたと打ち明ける。だが、次の瞬間には、黙って自分のもとを去っていった親不孝者、と娘に毒づき始めるのだった……。

### 3. 『影の季節』

15世紀の「大航海」時代以来、数世紀にわたって三角貿易が行われた。ヨーロッパはアフリカ大陸に武器を持ち込み、アフリカからは、奴隷貿易によって、一億とも数千万ともいわれる人々が、間断なく、アメリカ諸大陸とカリブ諸島に連行された。目的地にたどり着く前に息絶えて、大西洋の海に投げ入れられた人々もおびただしい数に上る。その間、人々を奪われ続けたアフリカの社会は甚大な荒廃を蒙った。

19世紀に奴隷貿易が停止され、かわりに、ヨーロッパはアフリカ大陸の植民地支配に乗り出す。以降、アフリカの人々は、強制労働、世界大戦への動員という形で、大陸内部での、あるいはヨーロッパへの移動を強いられた。

小説『影の季節』では、大陸で奴隷貿易が始まった頃、人々がいまだ奴隷貿易の何たるか、それがもたらす社会の荒廃が何たるかを知らなかった地点での、奴隷狩りの有様が描かれている。したがって、小説には、「奴隷」「奴隷貿易」「ヨーロッパ人」「白人」などの言葉は一切出てこない。

『影の季節』の謝辞によれば、この小説が誕生するきっかけは、2010年にミアノが手にした、ルシー＝マミ・ンカケの『捕囚の記憶』<sup>(14)</sup>と題される調査報告だったという。サハラ以南のアフリカに、大西洋を横断した奴隷貿易の記憶が残っているかどうかの調査が、アフリカ文化協会とユネスコの協力を得て、ベナン南部で行われた。結果は、奴隷貿易の記憶は、口頭伝承で受け継がれており、他国でも同様の調査が行われるべきだというものだった。

従来ミアノは奴隷貿易に関する文献を渉猟していたが、実際に、奴隷狩りについてどのような記憶が伝えられているのかを知ってはじめて、奴隷貿易についての小説を書くことができたという。

執筆に際しては、当時のサハラ以南の共同体の日常生活、神話や習俗などについて研究し、カメルーンのディカ・ボナンベラの著作などに学んだという<sup>(15)</sup>。小説の舞台としては、ミアノの出身地であり、奴隷貿易を経験してきたドゥアラがモデルに設定されている。ドゥアラの言葉が作中でキーワードとして用いられ、巻末に語彙表が付されている。

小説は5つの部分に分かれ、それぞれにタイトルが与えられている。以下にその梗概を記そう。

## 煤けた曙光

ムロンゴ一族が暮らすミコンドという土地で、ある夜大火が起こり、その間に、十人の若者と、儀礼を司る長ら二人の年配の男の姿が消え失せた。原因不明の事態に、失踪者の母や妻たちは、自分たち自身がこの厄災の元凶ではないかと気遣い、自ら申し出て、村人から隔離された小屋に移る。女たちのなかには、儀礼長の第一夫人で産婆のエベイセや、その親友で呪術師のエレケらがいた。

失踪から三週間以上がたったある夜、隔離された女たちは、一斉に奇妙な夢を見た。影がやってきて、息子の声で、急いで生まれ変わらせてくれ、とせきたてたのだ。影は明け方まで女たちの小屋の上にかかっていた。村人はこの夢の意味を知ろうとするが、儀礼長が失踪しているため、だれも正しい夢解きができない。

女たちの一人であるエヤベは、夢の中の声から、息子が死んだと直感した。そこで、村の命令を無視して家族の元に戻り、死者を弔う歌と踊りを捧げた。そして、ふるさとの土を死者に撒きかけるといふ、聖なる喪の儀礼を執り行うため、夢で息子が告げた「水の国」を探して旅立つ。

一方、呪術師エレケは病に倒れ、首長自らが隣国のブウェレに赴くべしと言い残して息絶えた。そこで、首長ムカノは従者とともにブウェレに向けて出発した。首長は清廉な人物だが、その異母弟ムタンゴは策謀家で、兄の座を狙っている。ムタンゴは、情報収集のため兄より一足早く隣国に赴いていた。

## 影の言葉

ブウェレは、女王が治める内陸の国で、海岸の国とも隣接している。ムタンゴは、ブウェレの猟師から、「ムロンゴの男たちが藪を抜けて海岸に行った。海岸の国の者は、大洋を渡って来た、雌鶏の足をした異人たちから武器や宝石をもらって、神様気取りで尊大にふるまっている」と聞かされる<sup>(16)</sup>。

その夜、ムタンゴは金縛りにあい、「なぜ、その男と歩むのか？ブウェレが我らを網に掛けたのがわからないのか」と問う声を聞いた<sup>(17)</sup>。翌日、ムタンゴは女王に面会しようと宮殿に赴くが、捕らえられて舌を抜かれ、捕虜にされる。

まもなく、首長ムカノらがブウェレに到着。女王は、ムロンゴたちの失踪については知らないが、国の境に男たちの通った痕跡があるようだと答え、ムカノは指示された場所へ探索に赴く。だが実際は、ブウェレがムロンゴの男たちを捕らえていたのだった。

## 水の道

エヤベは、六日間歩き通して、沼地に迷いこんだ。沼に足を取られてあやうく溺れかけたところを、土地の人に助けられ、高床住居のある集落に案内された。そこには、失踪していたエレケの夫ムティンボがいた。ムティンボは、ブウェレに連行される途中で脱走を図り、足を射られながら逃げのびたのだという。

エヤベを救ってくれた村はベバイエディという。ムティンボと同じように逃亡した捕虜たちが作った共同体である。ブウェレが冠水する土地を嫌うので、沼地を隠れ処としたのだ。住民は優しかった。

ムティンボの傷は深く、やがて息絶える。エヤベがムロンゴの言葉で葬いの歌を歌うと、村中が唱和してくれた。エヤベは慰められ、ふたたび水の国を目指した。

一方、隔離されていたムロンゴの女たちは、まもなく帰宅を許されたが、夫や共妻、実の子さえも、女たちを疫病神のように忌み嫌った。それゆえエブシのように、再び隔離小屋に戻って、そこで息子の帰りを待とうとする者も現れた。

この間、首長たちは、失踪者の足取りを求めて食事も取らずに歩き続けていた。

## とらわれの地

エヤベはブウェレの首都にいたり、そこで、丸刈り頭のムタンゴが王女にかしづくさまを目撃する。そこへ、エブシの息子のムクディが現れ、海岸の国イセドゥのとある白い建物へとエヤベを導いた。そこには、足かせをはめられ、丸刈りにされた十人ばかりの大人やこどもがいた。ムクディによれば、ある時、北から異人が来て、金属や武器と引き替えに人間を引き渡すよう、イセドゥに要求したという。だが聞き入れられなかったため、異人はイセドゥの人質を取って、凄惨な仕打ちを加えた。イセドゥは屈服し、自国の犯罪人などを差し出してしのいでいたが、次第にブウェレの領域をも侵犯するようになった。異人からえた武力を背景に、イセドゥはそれまで往来のなかった海岸沿いの民とも交わり、勢力を伸ばした。イセドゥの王子たちは西洋の文物や衣装に夢中だという。エヤベは頭を剃って捕虜の姿をよそおい、荷が交換されるという船着き場を目指した。

一方、首長が不在のムロンゴの村に、ブウェレの獵師たちが大勢現れ、人狩りが始まった。抵抗する者は殺され、合議中の長老たちは捕らえられ、聖所に火が放たれた。生き残ったムロンゴ人はブウェレに連行された。

ひとり、エベイセとエブシのいた隔離小屋だけが襲撃を免れた。エベイセの長男も惨殺された。その切り離された頭部を抱いて、老いた母エベイセは、試練にたじろいではいけないと自らに言い聞かせる。

## 最期の時

捕虜取引の現場にたどり着いたエヤベは、そこが息子の墓場だと直感する。だが、エヤベはそこで見とがめられ、追い詰められて、海に身を投げる。

一方、エベイセは、村で殺された27人の遺骸を埋葬し、エブシとともに失踪者を探す旅に出た。途中沼地に迷い込み、泥に足を取られて手近な枝にすがったところ、それが首長ムカノの杖だと知る。エベイセがムロンゴの人々の最期を偲んで歌っていると、唱和する声が聞こえ、エヤベが現れた。

エヤベは、衆前で海に身を投げたが、追隨者が出ることを嫌ったイセドゥの兵士に引き上げられたのだった。ムクディとともに牢に入れられていたところへムタンゴが現れて、身振りで身代わりを申し出た。ムタンゴに変装したエヤベは、ムクディとともに脱獄して沼地に至ったのだ。

母のエブシと再会したムクディは、捕虜にされた時、恐怖心からいっそ死のうと食べ物を口にできなかったのだと告げる。そのため衰弱し、取引の対象から外されて、結果的に命拾いをしたのだ。これに対して、エヤベの息子のムカテは、「この身をあきらめ、魂となって村へ帰ろう」と仲間呼びかけ、九人の若者は、乗り込まされた船からそろって海に身を投げた。儀礼長はひとり船で運ばれていった。

エヤベは、海に消えた九人の若者と、エベイセが葬った27人のための墓碑をベバイエディの地に建て、そこをムロンゴの新たな聖所にしようと語る。近くの沼で、溺れた首長たちの亡骸が見つかり、翌日からその地にマンガンガの美しい花が咲きほこったのだった。

## 4. 影の時代

### (1) ミアノの歴史認識

ミアノは、現代アフリカの紛争の起源が、植民地支配より以前の、奴隷貿易にあると考えている。「奴隷貿易はアフリカを変質させた。植民地支配は事態を深

刻化させたにすぎない」との立場に立っている<sup>(18)</sup>。そして、「この間の試練に学んだなら、アフリカ大陸は疑いなく、世界の未来の一角を形作ることができただろうに。植民地時代の土壌から生まれたアフリカの政治家たちは病んでいて、かつての植民者を真似るばかりで、独立を台無しにしてしまった」と厳しく批判する<sup>(19)</sup>。奴隷貿易に端を発する暴力と拉致の構造は、植民地時代に強化され、ポストコロニアルの現在も存続し続けているというのだ。

したがって、「奴隷貿易で行われた、サハラ以南のアフリカにおける襲撃と、現代の人身取引とはパラレルな関係をなす」とミアノは言う<sup>(20)</sup>。この並行関係は、『影の季節』をもってはじめて明確に示されたといえる。すなわち、『影の季節』では、近隣国による奴隷狩りや強制連行が描かれ、現代アフリカ・シリーズでは、武装集団による近隣住民への略奪やこども狩りが描かれているのだ。現代アフリカシリーズにおける、拉致された九人のこども、27人の武装集団などの数字が、『影の季節』では、海に沈んだ九人の若者、27人のムロンゴの死者としてくり返されるなど、細部にわたってその並行関係を示す工夫がなされている。

また、暴力と拉致の歴史が、奴隷貿易以来今日までとぎれることなく続いたということは、その間犠牲者も絶えることがなく、人々の心の傷も癒されるいとまがなかったことを意味する。『夜の内側』では、「エクの村人が経験した恐怖は、二世代、三世代たっても、トラウマとして人々の心に残り続けるだろう」と語られ、また「アフリカは、ジェノサイドや内戦で互いに傷つけ合い、自分の傷を深くえぐり続けてきた」とも記されている<sup>(21)</sup>。

奴隷貿易以来、連れ去られた人々はもちろんのこと、残された人々も心傷ついたまま、悲しみは世代から世代へと引き継がれてきたのだ。その事態を、ミアノは『深紅の夜明け』でつぎのように表している。「事のなりゆきのせいで、何世紀にもわたって、大陸の母たちの心は虚空に掛けられてきた。これら母たちにとって、時間は止まっていた。三角貿易の略奪以来、連れ去られた者たちに母親がいたことを、だれも語ろうとはしなかった」<sup>(22)</sup>。

## (2) 影のイメージ

ミアノは、デビュー当時から、「影」 ombre、「闇」 ténèbres、「暗いもの」 chose obscure といったイメージにとらわれてきた作家である。『影の季節』において、「影」とは何を表しているのだろうか。

まず、小説の献辞に、「大西洋のかたびらが覆う影の住人に。彼らを愛していた人たちに」とある。ここで「影」とは、「奴隷貿易で運ばれる途中、海の藻屑と消えたアフリカ人が漂いつづける場所」を指している。これは、奴隷貿易について伝える口頭伝承の表現と一致している。エマニュエル・ドンガラの小説には、口頭伝承で、大西洋が、「死者たちが暮らしている影の国」と形容されていることが記されている<sup>(23)</sup>。

つぎに、『影の季節』のはじまりの部分で「冷たい煙のような影」<sup>(24)</sup>があらわれて、女たちの隔離小屋にかかる。この影は、小説の後半で、奴隷船から海に身を投げた若者たちの魂であったことが分かる。また、この影は、首長の弟ムタンゴにも訪れて、ブウェレと通じていることを非難する。

さて、小説では「影は、隔離小屋だけにとどまっていたのではない。影は世界を支配している」とされる<sup>(25)</sup>。また、語り手は、「影はこの世界を覆っている。影は、共同体同士を相争わせ、生まれた土地を捨てさせた。時が過ぎたとき、月が月を重ねたとき、誰がこの引き裂かれのすべてを覚えているだろう」と問いかけるのだ<sup>(26)</sup>。そして、「あの夜、息子に再び会えないでいる女たちの小屋に影が居座ったのは、見知った世界が消滅したことを知らせるためだったのだ。だが誰も理解できなかった」とされる<sup>(27)</sup>。また、首長が、影の訪れの意味について天に問うと、「何もかもがこれまでとは違ってしまおうだろう。ムウィティティ（影）の時代が来た」との託宣が下される<sup>(28)</sup>。

したがって、『影の季節』では、「影」は、無念を抱く靈魂のみならず、奴隷貿易や、奴隷貿易が支配する時代をも示しているのだ。

一方、現代アフリカ・シリーズでも、「影」には、過去の諸霊や暗い過去のイメージが与えられている。

『深紅の夜明け』では、武装集団のリーダーは、「影たち ombres にとりつかれた（狂気じみた）男」<sup>(29)</sup>と表現され、「影たち」は諸霊のイメージを帯びている。また、「（大陸が、人類史を押し上げるその高みに到るには）大陸は、自分の影たちに直面しなければならなかった。自分の過去と和を結ばねばならなかった」<sup>(30)</sup>とされ、影は、諸霊や奴隷貿易の過去を示している。さらに、主人公のアヤネは、「世界は光を奪われて、闇 ténèbres が空にかかっているように」感じ、「この大陸の中心で住民の魂を蝕んでいる、この暗いもの chose obscure は一体何だろう」と自問している<sup>(31)</sup>。

したがって、『影の季節』で始まりを告げられた大陸の「影の時代」は、現代アフリカ・シリーズの世界においても、いまだに終わりを告げていないのだ。

### (3) 影の時代に通底するもの

さて、現代アフリカ・シリーズと『影の季節』では、扱われている時代が数百年も隔たっているにもかかわらず、その内容にはいくつかの共通点が認められる。

#### 共同体

いずれの作品でも、舞台となる共同体は閉鎖的で、政治を司る者たちは利己的であり、それが共同体の崩壊をもたらす。

『影の季節』のムロンゴ一族は、武力を用いず、隣国と友好的に暮らしてきたが、それは、共同体が内向きに充足し、外界に関心を持たないということでもあった。長老たちは、共同体より個人の利益を優先し、失踪事件が起こっても、共同体の成員に原因を求め、神に供物を捧げるばかりだった。そのため、隣国からの二度の襲撃で、共同体はあえなく崩壊し、人々は相手国の最下層民として編入され、民族の言葉を失い、奴隷貿易の対象にされてしまうのだ。

現代アフリカ・シリーズのエク一族も、世界の動きから取り残されたように生活している。首長は自身の損得ばかりを心に向け、武装集団の噂を聞いても反応せず、その結果、あっけなく村の少年たちをさらわれてしまうのだ。

#### 夢の役割

『影の季節』の共同体社会では、夢は、覚醒時とは異なるもうひとつの現実とみなされている。夢で霊 *esprit* が真実を告げるのだ。また、人は、自らの魂を身体から離脱させることができ、その方法も社会的に確立している。さらに、夢で霊のおとずれを受けた者は、それが、悪の化身ではなく、真正の霊であることを確かめてから、霊に応えなければならないとされる。また、夢の解釈は、その能力が認められた者に委ねられている。

たとえばムタンゴは、金縛り状態になると、意識を集中して、いったん霊として身体から離脱し、自由に周囲の様子を観察してから、再び身体に戻ろうと試みる。また、ペバイエディ村に逃げ込んだムティンボは、自分が生きていることを

夢で妻のエレケに告げようとするが、衰弱が激しく、幽体離脱ができない。

また、九人の若者が海に飛び込んだが、これは絶望の身振りではない。エヤベの息子のムカテは、魂となって母のもとに帰り、もう一度産んでくれと頼もうとした。それは、新しい身体の中で生まれ変わるといふ、いわば生きのびるための方策だったのだ。これに対して、儀礼長のムンデネは、若者の意図を理解したもの、このような場合に自分の肉体から離れるのは、試練に正面から立ち向かう態度とは認められず、したがって伝統的に禁じられていると告げる。そのためか、若者たちは影となって故郷に戻ったが、母たちは、影の主が息子だと確かめられなかった。それゆえ慣わしに従って、母たちは影からの呼びかけに応じなかったのだ。そこで、若者たちの魂は再び自分の身体に戻ろうとしたが、時すでに遅く、異人たちが、若者たちの身体を海に捨ててしまっていたというのだ。

また、夢解きについては、その任にある儀礼長が失踪したため、ムロンゴ一族は、事の真相にたどり着けずに混乱する。また、ムタンゴは、影からの非難を、「知り合いの猟師が命を狙っているから警戒せよ」という意味に誤って解釈したために、ブウェレの捕虜にされてしまう。

一方、現代アフリカ・シリーズでも、夜は霊がさまよう時、とされている。『夜の内側』では、夢解きは首長に求められている。また、『深紅の夜明け』では、少年エパに、夢で、人身御供にされた弟が現れるが、エパは、知らない声に答えてはならない、という言い伝えを守ってそれに応答しない。

このことは、夢や靈魂についての言い習わしが、今なお人々に根強い力を持ち、夢が、社会的に重要な役割を果たしていることを示していよう。

## 口頭伝承

『影の季節』には、ムロンゴ一族の歴史が口承でどのように伝えられているかが記される。それによれば、ムロンゴの祖先は、かつては男女を問わず長子が王位を継いでいた。ある時、長女のエメネが女王となったが、その弟が権力奪取を企てたために、エメネは、自分に従う者たちをポンゴ（北）からミコンドの地まで導いた。女王の死後、長男のムロンゴが跡を継ぎ、以来直系の男子が後継とされた。この時から、建国の始祖エメネ女王の名は、女性の成人儀礼の場でしか語られなくなったという。

また、かつてブウェレとイセドゥは、共通の祖先をいただく兄弟関係にあった。

のちにブウェレがイセドゥを海岸部に追いやったが、その後も両者は共存していたとされる。

ところで、ブウェレは、イセドゥから奴隷の供出を迫られて、ムロンゴを滅ぼすが、この時、口頭伝承されてきた歴史認識は、滅ぼす側にも滅ぼされる側にも何ら影響を及ぼしていない。

これに対して、現代アフリカ・シリーズでは、口頭伝承や儀礼は、支配を企てる勢力が自らの暴力を正当化するための道具となっている。

武装集団は、石油資源という真の狙いを隠して、自分たちの出身地域とエク村が共通の祖先で結ばれた兄弟関係だと主張し、新しい国作りへの参加を訴える。植民地支配で蒙った民族の分断を克服して、再統合しようと呼びかけ、そのために子ども兵を差し出せと迫るのだ。

さらに、村人の心を恐怖で縛って支配するために、いにしへの供儀の復活だと称して、食人を強要するのだ。

## 女性の立場

さて、アフリカ・シリーズ全体の重要な特徴として、作品が女性の立場から描かれていることが挙げられる。いずれの作品においても、女性たちは社会的に厳しい沈黙を課されていて、我慢強くこれに耐えている。

『影の季節』では、女性たちは、あまりにも多くの禁忌で縛られていると感じているが、終生村を出ることもなく、外界についての知識も持たない。

失踪した者は、その生死が分からぬゆえに、村では死んでも生きてもいない存在とみなされる。それゆえに、失踪者の妻や母たちは、遺族として泣くことも、帰還を待つ祈ることも許されない。彼女たちは、失踪者の身内として最もつらい思いをしているにもかかわらず、冷遇され、真情を吐露することさえ禁じられている。女たちのうちでまだ子どもを産める者は、一人の子どもの行方が分からなくなったからといって、嘆いてはいけないとされる。嘆けば人に不幸を伝染させるからなのだという。

現代アフリカ・シリーズでも同様で、『夜の内側』では、息子を武装集団に拉致された母たちは、子どもの遺骸を目にするまでは泣いてはいけないと定められている。また、『深紅の夜明け』では、「母たちはすべてを神に委ね、毅然と立って、なすべき事を、そのわけを知ることなく果たさねばならなかった」と

される<sup>(32)</sup>。

このように、いずれの作品においても、母たちは村にとどまって家族を守っている。その中で、あえて移動する女性たちが事態を動かしていくのだ。

『影の季節』では、身内の消息を求める三人の女たちが移動を開始し、それが共同体を再生させる起点となる。呪術師エレケの霊は、息子を弔うために出発したエヤベが、いにしえのエメネ女王の娘だとエベイセに告げる。そのエヤベは、ムロンゴの生き残りが再生する地をベバイエディ村に見出す。それは、かつてミコンドに一族を導いた女王エメネと相同の行程である。そして、新しい命をとりあげてきた産婆のエベイセが、息子の帰還を待ち続ける母エブシとともに、滅ぼされたミコンドの地を出て、新しい共同体ベバイエディでエヤベに合流するのだ。

現代アフリカ・シリーズでも、この女たちの出発のテーマは、アヤネやウェンギサネ、ムサンゴたちの移動という形で表される。

## 試練

「試練」*épreuve*は、ミアノ作品のキーワードのひとつである。「影の時代」が続かぎり、試練は続く。だが、どんなにつらくとも、生きて、現実と向き合わねばならないとミアノの登場人物たちはくり返し告げる。

『影の季節』の場合、ムロンゴの倫理として、命は聖なるものとされている。ゆえに、刑罰としての死罪も、自死も、認められていない。試練に対しては、命の限り、正面から立ち向かわねばならないと定められている。村の指導者たちは折に触れ、この掟に言及する。登場人物たちは、難局に当たるたびに、この教えを思い起こして勇気を奮い立たせる。

儀礼長は、若者たちが海に身を投げることも、ムクディが食を断つことも、試練に向き合う振る舞いとはみなさない。ムクディは、自身もそれを自覚しているために、仲間のうちでひとり生き残っても、帰郷しようとはしなかった。だが、エヤベを守って、試練に耐えて逃げのびて、母との再会を果たした時、若者は、これからはムクディとは名乗らず、九人の朋友のなしえなかったことを行って、生まれ変わりたいと告げる。

現代アフリカ・シリーズのエク村においても、『影の季節』と相同の倫理が働いており、『夜の内側』では、武装集団の襲来を予感した女性指導者イエが、試練に立ち向かうことを心に誓う。

#### (4) 希望の光

それでは、今日までつづく影の時代に、どのような希望の光が書き込まれているのだろうか。

現代アフリカ・シリーズの『深紅の夜明け』では、主人公は拉致された少年たちを故郷に帰還させ、自らも故郷への根降ろしを果たす。また、『来るべき日の輪郭』では、少女が母親のもとに帰る。いずれも故郷は厳しい状況下にあるものの、それへの「帰還」あるいは「根降ろし」に希望が託されている。

さらに、『深紅の夜明け』の主人公は、夢で「サンコファ」と嘆き叫ぶ女たちの声を聞く。サンコファとは、アカン語で「起源への回帰」を意味する神話世界の鳥である。後ろを見ながら飛び、口には多産の玉をくわえている。それは、いかにつらくとも、前進するためには過去を知らねばならないと告げる姿だとされる。

では、サンコファが示す起源としての過去とは何だろうか。小説の後書きには、「アフリカの民もまた、(ディアスポラの民と同様) 奴隷貿易の子孫である」とある<sup>(33)</sup>。作家はまた、次のようにも語っている。「奴隷貿易の時代に、捕らえられ、連行される最中に、アフリカの地で、息絶えた人々のことが忘れられている。カリブ人にもアメリカ人にもならなかったこれらの死者たちは、アフリカの記憶に最初に刻まれねばならない人たちだ。だが、事実はそうではない。彼らの歴史は教えられてこなかった。肌の色を同じくし、苦しみと死と忘却に結ばれ、さまざまに文化を異にするこれらの人々は、史上初のパンアフリカ集団を形成しているのだ」<sup>(34)</sup>。このことから、小説のサンコファは、奴隷貿易という過去に目を向けるよう促しているといえる。

ところで、アフリカ文学にとって、奴隷貿易がデリケートなテーマであることはすでにのべた。それは、ヨーロッパ人奴隷商人との取引から利益を得た勢力が大陸内部に存在し、それが、植民地時代をへてポストコロニアルの今日に至るまで、大陸の政治経済に影響を及ぼしている場合があるためだ。

だがミアノはあえて、奴隷貿易を想起せよと訴える。それは、「誰が加虐者で、誰が犠牲者かの色分けをするためではない。むしろ赦し pardon を訴えるためであり、それこそが未来への希望である。そして、赦すことは忘れることと同じではない」と語っている<sup>(35)</sup>。

そして、『影の季節』は、まさにこのサンコファの訴えに応えたものといえる。

だが、『影の季節』は死者への追悼にとどまるものではない。ここには、影の

時代の希望として、ベバイエディの存在が打ち出されている。奴隷貿易を逃れた人々が作った共同体に与えられたベバイエディという名は、「起源」を意味するという。実は、ベバイエディには、実在のモデルが存在する。現ベナンのガンヴィエの沼地に、奴隷貿易に抵抗し、逃亡した捕虜たちが新たな共同体を築いていたことが、口頭伝承で記憶されているのだ<sup>(36)</sup>。

ベバイエディでは、人々は共通の祖先神話を持たず、さまざまな言葉や習慣が混交し、新しい言葉や習慣が生成されている。エヤベは、ベバイエディの住人を「狂気が世界を覆ったときに、闇の国に住むことを拒んだ人たち」、「影に否といった人たち」と評している<sup>(37)</sup>。

エベイセが、ムロンゴの村が滅ぼされては、もはや先祖の助けがえられないと嘆くと、エメネ女王の娘たるエヤベは、ベバエディこそ、ムロンゴの生き残りにとっての新生の地だと宣言する。そして、先祖伝来の土地が失われても、先祖との関係は絶たれることがないと説く。先祖は時空に縛られず、子孫のいるところに遍在する。「先祖は、愛し合う者たちのそばに、働く女の近くに、新生児の泣き声の中にいる。幼子が、生まれる前にいた霊界のことを記憶していたら、自分の新しい肉体に、どんなに古い魂 *âme* が宿っているか分かるだろう」と語る<sup>(38)</sup>。また、「先祖は、太鼓のうなりや料理の仕方のなかに棲んでいる。学んだことや経験したことは奪われない。先祖の教えのうちで一番大事なのは、生き延びるために工夫せよということだ」と論ず<sup>(39)</sup>。そして、「ベバイエディの地では、人々の思い出は他の人びとの思い出と混じり合い、一つの歴史を織りなしている」と告げるのだ<sup>(40)</sup>。

奴隷貿易から逃れ、新たな共同体を築き、複合のアイデンティティーを形成した人々こそが、今に至る希望であることをミアノは記しているのだ。

## 5. おわりに

奴隷貿易の起源に遡り、大陸で、大西洋で、犠牲となった人々とその家族を記憶し、悼むこと。奴隷取引から逃れて、ひそかに新生の地を開いた人々を記憶し、尊ぶこと。奴隷貿易の犠牲者を、アフリカの近現代史の原点に据えることによって、アフリカとディアスポラの歴史を結ぶこと。そして、この奴隷貿易の起源を、家族を奪われた女性たちの目から描くこと。これらが、『影の季節』を中心とす

るアフリカ・シリーズにおいて、レオノーラ・ミアノが示した独自の視点といえるだろう。

アメリカ諸大陸、カリブ諸島についての直接の言及は、『影の季節』にはない。突然捕らえられ、どこへ連れて行かれるのか、人々が何一つ知らない時期の物語なのである。「雌鶏の足をした異人が船から降りてくるのを見て、大洋は水中のシシ（夜に太陽が通り過ぎる地下の世界）への通り道なのだ」と人々が推測し、異人たちが、地下世界に住まう霊たちだと考えられていた」時代の話なのである<sup>(41)</sup>。だが、奴隷狩りを逃れた人々が、アフリカ大陸内部に作った共同体についての記述は、ひるがえって、奴隷貿易の果てに、アメリカ諸大陸やカリブ諸島に連行された人々の生が、彼の地でどのようなものであったのか、読者に想像させずにはおかない。とりわけ、彼の地における「逃亡奴隷」の共同体について考えさせずにはおかないのだ。

幾千万のかけがえのない人々を奪われた大陸と、かけがえのない人々が離散させられた地において、大西洋という茫漠たる海に家族を引き裂かれながら、数百年にわたって、それぞれに人は生き、互いの共同体の中で、複数の文化や言語を撚り合わせながら再生への道を刻んでいった。ミアノは、その事実を創作の原点として、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ諸大陸の、アフリカ起源の人々について語る。それは、アフリカ文学に新たなパンアフリカニズムの流れを注ぐものといえるだろう。

## 註

- (1) Léonora Miano, *L'Intérieur de la Nuit*, Plon, Paris, 2005.
- (2) Léonora Miano, *Contours du Jour qui vient*, Plon, Paris, 2006.
- (3) Léonora Miano, *Les Aubes écarlates*, Plon, Paris, 2009.
- (4) Léonora Miano, *Tels des Astres éteints*, Plon, Paris, 2008.
- (5) Léonora Miano, *Ces Ames chagrines*. Plon, Paris, 2011.
- (6) Léonora Miano, *La Saison de l'Ombre*, Grasset, Paris, 2013.
- (7) Ayi Kwei Armah, *Two thousand Seasons*, Heinemann, London, 1973.
- (8) Kangni Alem, *Esclaves*, J-C. Lattès, Paris, 2009.
- (9) Tshitenge Lubabu, << Léonora Miano >>, in *Jeune Afrique intelligent*, no 2387, octobre 2006.
- (10) *L'Intérieur de la Nuit*, op.cit., p.99.
- (11) Thierry Gandillot, << L'Intérieur de la Nuit >>, in *L'Express*, septembre 2005.
- (12) Tshitenge Lubabu, << Léonora Miano >>, op., cit.
- (13) Ibid.
- (14) Lucie-Mami Noor Nkaké, *La Mémoire de la Capture*, Société africaine de culture & UNESCO, 1997.
- (15) Dika Akwa nya Bonambela, *Les Descendants des Pharaons à travers l'Afrique*, Osiris-Africa, Paris, 1985.
- (16) *La Saison de l'Ombre*, op.cit., p.75.
- (17) Ibid., p.85.
- (18) *Les Aubes écarlates*, op.cit., p.256.
- (19) Ibid., p.250.
- (20) ミアノの公式サイト [www.leonoramiano.com](http://www.leonoramiano.com) における『深紅の夜明け』の解説。
- (21) *L'Intérieur de la Nuit*, op.cit., p.122.
- (22) *Les Aubes écarlates*, op.cit., p.34.
- (23) Emmanuel Dongala, *Le Feu des Origines*, Albin Michel, Paris, 1987, p.57.
- (24) *La Saison de l'Ombre*, op.cit., p.19.
- (25) Ibid., p.167.
- (26) Ibid., p.137.
- (27) Ibid., p.174.

- (28) Ibid., p.154.
- (29) *Les Aubes écarlates*, op.cit., p.103.
- (30) Ibid., p.49.
- (31) Ibid., p.17.
- (32) Ibid., p.35.
- (33) Ibid., p.256.
- (34) ミアノの公式サイト [www.leonoramiano.com](http://www.leonoramiano.com) における『深紅の夜明け』の解説。
- (35) *Les Aubes écarlates*, op.cit., p. 258.
- (36) ミアノの公式サイト [www.leonoramiano.com](http://www.leonoramiano.com) における『影の季節』の解説。
- (37) *La Saison de l'Ombre*, op.cit., p.137.
- (38) Ibid., p.228.
- (39) Ibid., p.226.
- (40) Ibid., p.226.
- (41) Ibid., p.182.